

～「曾我の碑」として供養された鎌倉の板碑～

しょうきょうにねんあみだいたび えいじんねんあみだいたび
正慶二年阿弥陀板碑・永仁□年阿弥陀板碑

県指定有形文化財（歴史資料）

漆山地区を流れる織機川の東岸一帯の池黒、宮内から漆山を経て長井まで続く街道沿いを少し奥に入った所の壇上に2基の板碑が建ち並んでいます。南面する2基のうち、東側に建っているのが「正慶二年阿弥陀板碑」です。

凝灰岩を加工して重厚な板碑に仕上げています。高さ285cm、上部幅67cm、下部幅94cm、三角の頂部の下に突き出す額部に線が走り、額部下の碑面上部には阿弥陀如来の梵字の種子（※1）であるキークを薬研彫り（※2）（※2）^{やげん}しています。何とも豪壮な種子です。その下に「正慶二年癸酉二月□日、□白、法□」と刻まれています。正慶2（1333）年鎌倉時代末期・南北朝時代初期の北朝年号で、南北朝の元弘3年にあたります。造立者が北朝方であることを示しています。

西側の、もう1基の永仁□年阿弥陀板碑は、同じ凝灰岩製で、高さ270cm、額部下幅72cm、下部幅106cmです。碑面上部には阿弥陀を表す梵字による種子が薬研彫りされています。その下部には「永仁□年二□日」と造立年月日が刻まれています。□の所は風化して読み取れません。永仁は1293年～1299年ですから鎌倉中期の年代で、先に述べた正慶より30年以上古いこととなります。

鎌倉時代の置賜地方は、鎌倉御家人長井氏の支配下にあり、北条荘の地頭も長井氏です。池黒にもその配下の武士がいて、石造の供養塔婆である板碑を建てたのでしょう。

この2基の板碑は「曾我の碑」と呼ばれて供養されてきましたが、池黒の旧家佐藤七右衛門家の文書に、曾我の碑には正慶2年中雨乞いのため先祖が建てたとあります。また、池黒三堀寺旧蔵「光保里^{みつぼり}観世音縁起^{かんのんえんぎ}」に「承久中（1219年～1221年）、曾我兄弟ゆかりの尼2人がこの地に来たり、諸々に石碑を建立供養し、三堀観音を拝して帰った」とあり、興味深いです。本来は、血縁の人物の供養に建てられるものですが、曾我兄弟ゆかりの出来事により「曾我の碑」として供養されるようになったのでしょうか。



▲東側に建つ正慶二年阿弥陀板碑



▲歴史を感じる永仁□年阿弥陀板碑

※1＝梵字とは、古代インドの文字のサンスクリット語で、種子は如来や菩薩を像のかわりに刻んだもの。

※2＝断面がV字形になるように彫ること。

南陽市文化財保護審議委員 佐藤鎮雄
平成27年12月1日号 市報なんよう掲載